三ヶ島葭子令和の百首選

文学に目覚めたころ（明治三十五年～明治四十一年）

あたらしき年の始ともろともにあたらしきこと学ぶうれしさ

与謝野晶子との出会い　歌人三ヶ島葭子誕生（明治四十二年～大正二年）

あめつちのあらゆるものにことよせて歌ひつくさばゆるされむかも

たへがたくものなつかしき夕ぐれよわが櫛をさへ手にとりて見る

名も知らぬ小鳥きたりて歌ふとき我もまだ見ぬ人の恋しき

女居て楮（こうぞ）さらせり白梅の咲くと見下ろす谷の流れに

寂しさを歌ふ人なくなりし時ろをまの国は亡びしときく

筏（いかだ）組む木の音冴えて水ませるあさけのたにに鶯の鳴く

蕗の薹（とう）手にたくはへて谷川の石ふみゆけば山がらのなく

灰色の大き玉抱き三日月の沈むと見ゆるさびしき光

われさびし青き李の花に似て弥生の空のもとに悩める

君を得しよろこびなれど新しくおのれを得たる驚きぞする

われの来し道はみにくし魚の行く後ろの如くさざ波となれ

挟みたる羽をとほしてわが指と指に脈（みゃく）をば打つあきつかな

如何ばかり我を知るやと問はまほし褒むる人にも謗る人にも

麦藁の流るる如く木の流れ松明ぬれて水の増す音

ひろがりてすべなき我の恋に似ぬ蜻蛉の触れて渦を描く水

みづからを偽るよりも苦しかりありのままなる我を語るは

新しき女ぞ夢の女ぞといつの日待ちて我をとなへん

あらたまるこのさびしさよ君とある日こそひとりの心地するなれ

君を見ん明日の心に先だちぬ夕雲赤き夏のよろこび

結婚と出産（大正三年～四年）

昨日までけふの昼まで君と見し山暮れはてて雁鳴きわたる

水色の雨の中にて火の燃ゆる夜明けの山に君を思へる

逢ふところ道のかたへも草原もわれら世界のただなかとせむ

いざなひに来しとも知らずほほゑみぬ亡き啄木と夢に語りて

家のうち鍋などさげてゆきかへるゆふぐれにきく秋雨の音

わが子ともまだおぼえねどしほれたる花のここちにいたはりて抱く

樹は立てり立ちすくみたるわがごとくはたみなぎれるいのちのごとく

何よりもわが子のむつき乾けるがうれしき身なり春の日あたり

爪立てて我をつかめる手の力ゆるぶが如し子の眠りつく

まづ何をおぼえそむらむ負はれてはかまどに燃ゆる火など覗く子

親のかほけさやうやくに見いでたる瞳はいまだ水のごとしも

鈴ふればその鈴の音を食はむとするにやあはれわが子口あく

われいまだ道の半ばと思ふとき思ふことみなはかなくなりぬ

子のためにただ子のためにある母と知らば子もまた寂しかるらん

アララギ時代（大正五年～大正十年）

柔かき眉を重ねて栗の花小雨のなかにゑめる初夏

病めば子のやしなひがたく人のゐる湯ぶねの中に涙おとしぬ

蜂のゆく朝くらがりの庭にして爪紅（つまぐれ）の花赤しも白しも

夕川のつめたき水に洗ひたる小蕪ましろに積みあげてあり

ひとり病む真昼の床にいささかの小づかひ銭は置かれたりけり

もの縫へるわがかたはらに紙切りてしばしおとなし日にやけし子は

よく遊び疲れたる子は眠りたり生（あ）れしその日もこの顔なりし

我が家の梁に吊せる鱈の塩溶けてしたたり板間をぬらす

俥屋の足暑からん炎天の日の照りさかる深き埃に

露店の上二つ吊せる提灯の一つは消えをり草の香深く

夏の夜の賑はふ町を別るべき子の手を引きてゆき戻りけり

飛行場の出来て変れる所沢この道のところわが家なりし

二階ある家にうつりて久しぶりタべの雲の動くを見たり

訴ふべきなやみにあらず声立てて泣けば寂しも人あらぬ部屋に

物干の日向に靴を磨きゐる向ひの妻はもの思はざらむ

山越えて友をたづぬる初春の真昼の空に富士あらはれぬ

雪ふれば何かうれしくおのづから足ぶみをして唱歌をうたふ

一日にて別るる吾子のほころびを着たるままにてつくろひやれり

いつまでもものの学びたきに卒業の日は近づきぬ三月きたりて

タやけの空すでに暗しひらひらと頭の上を蝙蝠の飛ぶ

夕餉あとの火鉢の火をば消して立ちぬ我や寂しく生きざるべからず

いつまでも水浴びやめず弟はくちびるの色むらさきなるに

わが叔母が機織る軒に枝垂れて柿の実赤く色づきにけり

うすべにの山茶花咲けり始業時間おそくなりたる学校の庭に

つつみなほす舅の風呂敷けさ見れば牛引く太き綱をつつめり

引越の荷物いだして部屋ひろし本棚のあと畳に残る

わが庭の桜は夜目にほの白し訪ひこし友を送りいづれば

今は何も言ふことえずと友は泣きぬ今宵別れていつまた逢はん

はなむけに友がくれしはわがつねにほしと言ひける海老色りぼん

亀井戸の藤の花見にゆく人の赤き傘見ゆ畑の向ひに

咲きたわむ白百合の花さやりけん花粉つきたり白地の袖に

明日の朝幾つ咲くべき朝顔の蕾ふくらみタとなりぬ

秋風は空より吹きて心地よし散りしける柿の落葉の紅ゐ

三ヶ島葭子資料室開室３０周年記念事業　所沢市教育委員会文化財保護課

縁側に吾子とならびて朝露に濡れたるばらの花を見にけり

葭子の歌の世界の広がり　病床に臥した晩年（大正十一年～昭和二年）

藤の花さくべくなりぬ見あぐれば藤棚こめて煙るむらさき

わが夫と心へだてるさびしさを耐（こら）へて今宵父の死を守る

久し振の星空うつくし夏深み天の川さへ白く見えつつ

わが家のまうへをとほる飛行船大いなるもの空をゆくかも

空はれて遠き山見ゆ秋風に吹かれつつゆく友とわれかな

やや遠き我をいたはりわかれ路に立ちつつ友は涙ぐみをりき

色づきし森の梢を声もなくはなれてゆきし一羽の鳥

燃ゆる火を見つつすべなし運びこし蒲団によりてしばらくねむる

フリジヤの花買ひたれば花売が桃のつぼみを落してゆけり

春の雨けぶる欅（けやき）の梢よりをりをり露のかがやきて落つ

往来に馬をとどめて荷を下ろす人の汗にほふ家の中まで

夕立の雨なごりなく晴れわたり星のすがしき夜ぞらとなれり

わが家とさだめられたる家ありて起き臥しするはたのしかりけり

このタべ窓の板戸にはずみたるそのごむ毬は大きくあらん

思ひきり花瓣（はなびら）そらし白百合は力一ぱいの匂ひを吐くも

ポストまで行きがたくして幾たびも一つの手紙持ちかへるなり

一つ鳴けばまた一つ鳴き夕暮るる空にひととき鳴き交ふひぐらし

春の雨夜半に降りいでわが屋根に音あたたかくふりそそぎをり

命せまりて蝉の叫びしこの夜半を秋雨しづかに降りいでにけり

久々に来りし吾子はおほ父に言はれてわれの床近くすわる

置時計今宵とまりたり先の日に来りし吾子が巻きしままなる

きその夜の苦しみ思ひしみじみと今日ある命ありがたく思ふ

いささかの仕事なれどもこの弱きわれには深き覚悟要るなり

いきどほり堪へがたき時ゆくりなく外の面に照れる月を思ひぬ

さかりゐる一人の吾子を思ひつつ眼つぶりて飯かきこみぬ

この朝も遠き汽笛を床にして聞きてゐるなり鳴り終るまで

夜の更けの凍土（いてつち）をゆく下駄の音銭湯へゆく人人ならん

今にして人に甘ゆる心あり永久に救はれがたきわれかも

しみじみと障子うす暗き窓の外音立てて雨の降りいでにけり

絶詠（昭和二年）

屋根の上に水（み）づきてつもれる春の雪やや透きとほり夕晴れにけり

あたたかくなりけるものか夕ぐれて見れば火鉢の火は消えてあり

紙に吐きし啖赤からずわが窓にあたる障子の日かげのしづけさ

選者　・市民（一般・市内小中学校児童生徒）

・新版三ヶ島葭子全歌集刊行委員（秋山佐和子・久保田登・さいとうなおこ・脇晴代）

・作品については『新版三ヶ島葭子全歌集』（角川書店）掲載の文言と揃えた。

・歌集等で重複されて詠まれた歌については、自選歌集『吾木香』での表現を優先した。

・読みやすくするために、一部現代仮名遣いでルビを追加した。

絵：埼玉県女子師範学校在学中の葭子が描いた「木苺の実」